

横浜の古民謡

近年、歌としての民謡を耳にすることが少なくなつた。本来の民謡は古くから庶民の生活や労働のなかで生まれ、庶民みずからが歌つた、祝い歌や仕事唄、娯楽唄やわらべ唄などの伝承歌をいう。しかし大正末／昭和初期ころから、観光振興や花柳界とむすびついた地元PRの目的で、新たな民謡づくりが始まる。このような創作民謡はレコード会社が作詞家・作曲家に依頼して生み出すレコード歌謡のジャンルにもなり、専門の民謡歌手も誕生した。これらは当時、本来の民謡に対して「新民謡」といわれた（横浜の事例について、平野「横浜の新民謡」『開港のひろば』一〇一号／二〇〇八年七月発行、を参照）。

しかしながら、戦後になると社会の変化が加速し、生活や労働に根ざした本来の民謡は、歌われる場も機会も先細りし、一部古老の記憶のなかにあるものと化していく。他方、レコード会社が生み出す創作民謡が増えていくにつれて主客逆転し、本来の民謡は、「古民謡」と称されるようになる。

文化庁が「民謡緊急調査」の名のもとに、全国規模で古民謡の調査・保存活動にのりだすのは、一九七〇年代後半である。古民謡は伝承者の声で、テープレコーダーで録音された。神奈川県は七九・八〇の両年度にわたって採集がなされた。

横浜古民謡保存協会

この調査は、県教育委員会編集で報告書が一九八一年に公刊された。同書に掲載された古民謡は三二五あるが、そのうち、五〇あまりが、五線譜で採譜・収録されている。さらに県教育委員会は、翌八二年に、古民謡採取を指導した永田衝吉を著者として『神奈川県民俗芸能誌・民謡編』を企画・編集した。この書は、その後の急速な社会変化と伝承者の高齢化のなかで、神奈川県民謡研究の集大成ともいうべき位置をしめる研究となつた。

民謡採集が確認できる。横浜市では、戦前の正史ともいえる『横浜市史稿風俗編』（一九三二年刊）の「第三章歌謡」に「大津絵節 雨の夜」や「野毛山節」が紹介されている。『保土ヶ谷区郷土史 下巻』（一九三八年刊）はさらに充実していて、「俚謡俗歌」として「保土ヶ谷名寄歌」「保土ヶ谷雲助歌」などの宿場をうたつたものから、「子守歌」や「手鞠歌」まで約三〇篇の紹介がある。このような取り組みに加えて、戦後の、

子が一体となつて熱演するもの、婦人を交えた一団など、にぎやかな場面も少なくなかつた。午前の番組はお祝早口言葉、手まり唄、ふな唄など十五種目、午後は解説をまじえ木びき唄、波止場唄など六種目。なお、これを機会に近く横浜市古民謡保存協会が設立される」（『神奈川新聞』昭和三二年八月一九日）



横浜市立図書館での古民謡録音（『神奈川新聞』昭和32年8月19日）

文化庁が「民謡緊急調査」の名のもとに、全国規模で古民謡の調査・保存活動にのりだすのは、一九七〇年代後半である。古民謡は伝承者の声で、テープレコーダーで録音された。神奈川県は七九・八〇の両年度にわたって採集がなされた。

以上のような全国的取り組みばかりではなく、地域的な取り組みもあつた郷土誌・民俗誌の一環として、地域の青年団や学校教師などが主体となつた

大觀」の刊行が企画され、第一編「関東編」（一九四四年刊）から刊行が始まった。この事業には、藤井清水・小寺融吉が協力し、古民謡が五線譜に採られ、あらたな水準での記録となつた。

しかししながら、戦後になると社会の変化が加速し、生活や労働に根ざした本来の民謡は、歌われる場も機会も先細りし、一部古老の記憶の中にあるものと化していった。他方、レコード

これらは、当時、本来の民謡に對して「新民謡」といわれた（横浜の事例については、平野「横浜の新民謡」『開港のひろば』一〇一号／二〇〇八年七月發行、を参照）。

して生み出すレコード歌謡のジャンルにもなり、専門の民謡歌手も誕生した

くりが始まる。このような創作民謡はレコード会社が作詞家・作曲家に依頼

ろから、観光振興や花柳界とむすびついた地元PRの目的で、新たな民謡づ

歌をいう。しかし大正末～昭和初期こ
仕事唄、娯楽唄やわらべ唄などの伝承

から庶民の生活や労働のなかで生まれ、庶民みずからが歌つた、祝い歌や

歌としての民謡を耳にすること
とが少なくなつた。本来の民謡は古く

横浜の古民謡

二〇一九年四月二日

長安采風
唯恩
黃兵

卷之三

ち、テープレコーダーが用いられた。このとき収録された古民謡は『横浜古民謡録音次第』として、歌詞集が、孔版印刷された（前出の永田著『神奈川県民俗芸能誌・民謡編』によれば、録音テープが「横浜市図書館」に架蔵されていたようであるが、未確認である）。歌詞集の表紙には、主催横浜市図書館・横浜市古民謡保存協会とあり、新聞記事のとおり協会が設立された。

この横浜古民謡保存協会は、会長に横浜市長半井清、副会長には、前県議会副議長の新堀源兵衛、元神奈川県会議長で市会議員の堀内萬吉、市会議員の岩沢泰太郎の三人がなり、小串清一（元参議）・松尾嘉右衛門（県建設業協会長）・碓井貞義（県民謡協会会长）・蔵原年光（県議）・関寅吉ら七名が顧問として名をつらねた。

同協会の成果としては、昭和三二（一九五八）年六月一五日に、東京六本木の国際文化会館での民謡大会で披露された古民謡の歌詞を印刷した『横浜古民謡集・上』と、翌三四年三月二四日に県立音楽堂での古民謡大会の歌詞を記録した『横浜古民謡集・下』を見ることができる。また、昭和三五（一九六〇）年五月一二日に南区公会堂に開催された横浜古民謡大会の録音が、非公開ながら残り、うち九つの唄が採譜されて平野監修『横浜ふるさと歌物語』（一九〇八年刊・財團法人はまぎん産業文化振興財団編『マイウェイ』69号）に掲載された。

古民謡の伝承者と調査内容

表「横浜の古民謡記録とその分類」は、これまで紹介した調査で採集された横浜の古民謡を、「神奈川県民俗芸能誌・民謡編」の分類にそって内容区分したものである。古民謡は唄が同名であっても、伝承者によって、歌詞やメロディーに違いがあることが一般的

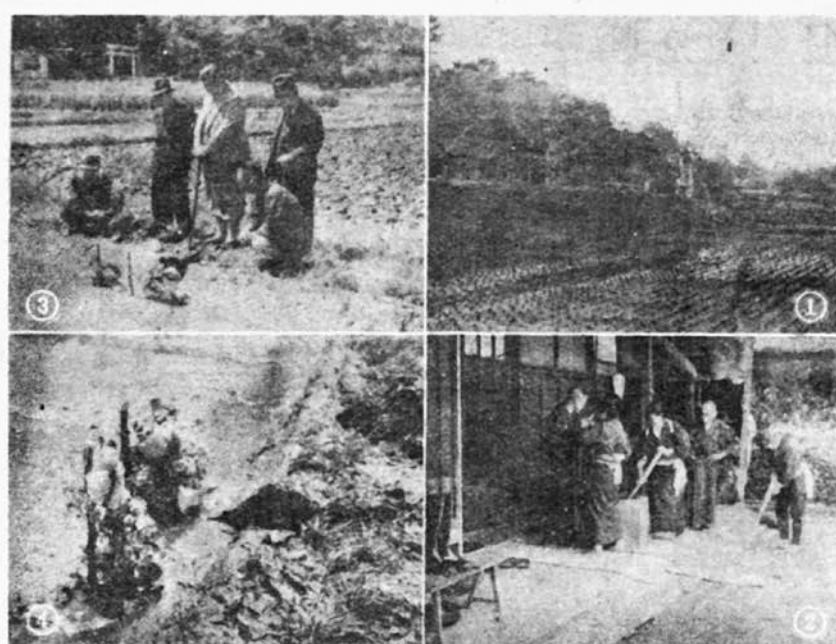
福島雄次郎の古民謡採集

福島雄次郎（一九三二～二〇〇五）は、熊本県に生まれ、東洋音楽短期大学を卒業後、昭和三六（一九六一）年より茅ヶ崎に居をかまえて、音楽活動のかたわら県内の民謡・民話・伝説の採集をすすめた。そして、四三年（一九六八）年一〇月から七一年二月まで、『新かながわ』紙上に八一回にわたつて「ふるさとの民謡」を連載した。そのうち、横浜市域で採集された唄は一七である。その後福島は、鹿児島短期大学助教授に就任して神奈川を離れ、同学教授として平成一〇（一九九八）年に退職。名誉教授となつた。

『新かながわ』紙の連載記事は、掲載より約二〇年をへた一九九〇年に、神奈川郷土民謡研究会編『神奈川ふるさとの民謡』として刊行された。福島と浜名政昭によつて全部の唄に採譜がなされている。また、「筏かけごえ唄」ほか3つの「横浜港湾労働者の唄」が採録されているのは、とくに注目すべき特長である。

各調査を内容的に検討しよう。戦中期に取り組まれた①日本民謡大観の調査は全国規模で、調査者が横浜の事情に通じているわけではなく、横浜の古民謡がどのような場で、どのような状況のもとで唄うものであるかをあらかじめ知つてゐるわけではなかつた。全国的に村落が広く展開している事情のもとで、神奈川県下の調査対象もまた、農村が基本になることは致し方ないことではあつた。それでも、横浜市域のその後の古民謡調査で、幾度も採集されることがある「焼米搗唄」を何

插画一三一 田谷の水口祭習俗
①田谷風景 ②焼米搗 ③水口祭 ④同じく



焼米搗唄が唄われる田谷の光景と水口祭りの習俗

田谷の焼米搗唄のリズムは、二拍子になつたり三拍子になつたりする特徴的な仕事唄である。

（『日本民謡大観 関東編』p344）

いることは、農民の歌謡としてとくに注目したものと思われる。

戦後、横浜開港百年祭前に取り組

まれた②から⑤にわたる、横浜古民謡保存協会による記録は、相互に重複はみられるが貴重な成果であった。

第一に、舟唄・船頭唄という、儀式唄・祝唄の範疇にある、横浜の海の唄が収録されていることである。「港へ入れば船渠が見える、わしも乗りたい新造船」（波止場船頭唄）などの歌詞

港湾労働唄	お茶場唄	西洋洗濯唄	子守歌	ささら踊り 唄・盆唄	娯楽唄・酒宴唄		わらべ歌
					娯楽唄	雑謡・俗曲	
お茶場唄				笛羅踊	野毛山節	六斎唄／ほんぽん唄／権助唄／金沢大津絵／お札まき唄	
お茶場唄				笛羅踊唄	野毛山節／甚句／万作手踊唄／尻取唄／	大津絵／権助唄／厄払／お札まき唄／獅子舞唄(疫病除)／数え歌(野毛山心中)／杉田町六斎踊唄／口説き節(八百屋お七)／五目節／汲沢町念佛踊唄／白増粉屋／お念佛唄(薬師讚)／拳唄／駕籠かき唄／漁師唄／石工唄／歌題目	
お茶場唄				笛羅踊唄／笛羅唄	野毛山節	六斎唄(釈迦讚)／万作手踊／かつばれ／大津絵(金沢)／地行唄／お祝儀唄／盆々唄／浮島唄(かわりもの)／浮島唄(早寝)／お念佛唄(慶讚)	
お茶場唄 (南)	ザラ板節 (南)／ポンコツ節(中)			笛羅唄(南)	野毛山節(南)／新川踊(港北)／尻取(南)／	駕籠かき唄(南)／五目(南)／金沢大津絵／浮島踊(港北)／獅子舞(港北)	
筏かけごえ唄(中)／日本波止場かけごえ唄(中)／中波止場かけごえ唄(中)	お茶場節(中)		子守唄(やんま釣りの唄)(中)		本牧甚句(中)／甚句(港北)	長持唄(戸塚)／仇討ち数え歌(神奈川)	手まり唄(中)
お茶場節(中)	お茶場節(中)	子守歌(戸塚・泉・瀬谷)	盆唄・盆踊唄(泉3)／飴屋踊(泉)／あめやおどり[こなやおどり](戸塚)	荒磯節(中)／さのさ節(田のなかで)(泉)／かぞえ唄(中)／甚句(中)／戸塚・泉・栄・緑)／石川甚句(中)／サノサ(戸塚)／かぞえ唄(泉)／セイトの唄(中)／野毛山節(中)／相撲甚句(中)／甚句(神奈川甚句)(神奈川)	大津絵(神奈川・泉)／おおつえ〔高砂〕(神奈川)／どどいつ(中)	タツボ〔タニシ〕(泉)／ずいずいずつごろばし(戸塚)／新町が一番(中)／手あわせ〔裏へ行ってころんで〕(栄)／かっちゃん(神奈川)／しりまくり(瀬谷)／まりつき唄(瀬谷)／じゃんけんの唄(瀬谷)／ひいふうみいよう(瀬谷)／ちょきなつぱの唄(瀬谷)／おおさむこさむ(瀬谷)／おはじき(瀬谷)／指あそび(瀬谷)／はねつき唄(瀬谷)／まりつき唄(瀬谷)／戸塚・栄・神奈川)／指あそび(泉)	

音次第」(孔版印刷・刊記なし／横浜市中央図書館蔵)。③横浜古民謡保存協会編『横浜古民謡集・上』(昭和33年5月20日刊)。④横浜古民謡保存協会編『横浜古民謡集・下』委員会編『神奈川県民謡緊急調査報告書』(1981年刊)。

五線譜での採譜があるもの。

「板節」と好対照である。

第三に、糸取り（糸繰り）唄や製糸場唄、キビソ切唄などの、製糸業にかかるわる唄が採集されている。「糸をひくならヨ、太より細く、信州一番の十四中」と唄う③の「製糸場唄」、⑤の「糸繰り唄」は、輸出生糸の最低品位である「信州上一番」を目指した経営方針が、歌詞に反映したものである。

「ポンコツ節」が詠銭されていることは注目される。横浜では外航船舶からのシーツや枕カバー、ナップキンなどの洗濯需要は大きく、洗濯物に石けん水を含ませて、御影石にたたきつけて汚れを落とすときに唄う「ポンコツ節」は力仕事の男唄であり、洗濯板の小物を「シツチキジャブジャブゴッショゴショ」と、リズミカルに唄う女唄の「ザラ板節」と好対照である。

は、港風情を伝える庶民文化の遺産である。

第二に、仕事唄として、貿易と密接にかかわる「お茶場唄（お茶場節）」が採集されたことである。製茶の輸出に際して、乾燥した茶葉をさらに加熱する、外国商館が經營する再生工場で唄われた労働歌で、夏季の猛暑のなかでの過酷な労働を唄でまぎらわすために生まれた。横浜港の製茶輸出は、明治三三（一八九九）年の清水港の外國貿易開始を機に激減するが、夏の季節労働としての「お茶場稼ぎ」は、その過酷な環境とともに、多くの庶民の記憶に残り、その唄もまた残った。加えて、西洋洗濯の唄である「ザラ板節」

は、港風情を伝える庶民文化の遺産である。

横浜の古民謡記録とその分類

	儀式唄・祝唄			仕事唄				
	木遣	舟唄	祝い唄	農耕・農産仕事唄	馬子唄	地ならし唄	糸取り唄／製糸場歌	木挽き唄
① 日本民謡大観（関東編）／1942年5月7日				焼米搗唄（4題、戸塚・田谷）／代搔唄（港北・日吉）／田植唄（戸塚・田谷）／田植唄（港北・日吉）／粉搗唄（戸塚・田谷）／粉挽き唄（都筑・川和）				
② 横浜古民謡録音次第／1957年8月18日（於：横浜市図書館）	金沢木遣唄	舟唄／波止場船頭唄	お祝い早口言葉	焼米搗唄／田植唄／臼挽き唄／粉すり唄／麦うち唄	馬子唄			木挽唄
③ 横浜古民謡集・上／1958年6月15日（於：東京・国際文化会館）	金沢木遣唄／どんじよめ木遣唄	波止場船頭唄／舟唄／とんたく船頭唄／子安船頭唄	お祝い早口言葉／お祝儀唄	焼米搗唄／田植唄／臼挽き唄／粉すり唄／麦うち唄／粉搗唄／麦打唄	馬子唄		製糸場唄	木挽唄
④ 横浜古民謡集・下／1959年3月24日（於：神奈川県立音楽堂）		子安船頭歌*／船唄／波止場船頭唄	お祝い早口言葉／お祝い早口言葉	粉搗唄（唐臼ひき）／田植唄／臼ひき唄／焼米搗唄／臼ひき唄（おさな節）／臼ひき唄／焼米搗唄／			製糸場唄／キビソ切唄	木挽唄
⑤ 横浜古民謡大会／1960年5月12日（於：南区公会堂）		どんたく舟唄（南）／子守船頭唄（神奈川）／子安の舟唄（神奈川）／波止場船頭歌（南）	お祝い早口言葉（金沢）	田植唄（南）／麦打唄（南）／唐臼挽き唄（南）／臼挽唄（戸塚）／くるり唄（南）			糸繰り唄（保土ヶ谷）／製糸場唄（保土ヶ谷）	こびき唄（南）
⑥ 神奈川ふるさとの民謡／1968年～71年	木遣り（神奈川）	船おろし唄（神奈川）	新川踊り唄〔万作踊り唄〕（港北）／浮島〔万作踊り唄〕（港北）	田植唄（戸塚）／ボッサラ打唄（戸塚）／植田節（港北）／臼ひき唄（都筑）				
⑦ 神奈川県民謡緊急調査報告書／1989-90年		十七〔舟歌〕（神奈川）／一ノ谷（神奈川）	荒磯節（中）／新川〔マンサク、アメヤオドリ〕（都筑）／ホウネンマンサク（緑）／建前祝唄（都筑）	麦打ち唄〔ボーチ唄〕（都筑）／クリイウチ（栄）／焼米搗唄・焼米の唄（泉・栄3・戸塚・磯子2・港南）／臼挽唄・唐臼ひき唄（旭）／都筑4・栄2・神奈川・青葉・泉2・港南2・戸塚・磯子）／田植唄・植田唄（都筑・瀬谷・戸塚・港南・磯子）		地形とり（旭）	糸取唄（保土ヶ谷・泉2）／ヤマキリ唄（中）	

出典：①日本放送協会編『日本民謡大観 関東編』（1944年刊）・『同 復刻版 現地録音・CD解説』（1992年刊）。②横浜市図書館・横浜古民謡保存協会編『横浜古民謡録』（刊記なし）。⑤南公会堂での横浜古民謡大会録音（昭和35年5月12日）。⑥神奈川県郷土民謡研究会編『神奈川ふるさとの民謡』（1990年刊）。⑦神奈川県教育

註：唄名の後の（　）は、伝承者・演者の出身地。出身地の後にアラビア数字が続く場合は、複数以上の唄があることを示す。区名は現在の区名に置き換えた。下線は、

その他まったく別物の糸取り唄・製糸場唄が、⑦でも採集されている。
 農村ばかりではなく、横浜の海にも船舶や貿易にかかる数多くの労働者がいて、横浜の都心部でも古民謡が存在したことを証明したのが、横浜古民謡保存協会の活動の大きな成果であつた。その一方で、残された資料から判断する限りではあるが、唄がどのような「場」や「時」で歌われたのか、という局面を記録することには、注意が乏しかつたようにも思われる。先の「ボンコツ節」が唄われた局面の記録は、ただ一人、唄の前置きとして伝承者が歌詞マイクを前にして説明したことによつて今日に残つた。「ボンコツ節」の歌詞からは、洗濯唄であることを示すものは何もないことから、伝承者自身によつて唄われる局面を紹介することとなつたのである。しかしながらそれでも、録音と歌詞の採集をもつて、地元の記録としての古民謡を残した保存協会の活動は特筆すべきである。

⑦の緊急調査からすでに三五年を経過した現代では、記憶のなかで古民謡を憶えている、聴いたことがある、という人がわずかに残つているというのが実際であろう。新たな採集はほとんど叶わない時代に来てしまつている。録音媒体の刷新は、古い記録メディアを置き去りにしがちである。古民謡研究の今後の進展は、さしあたり採集当時の音源を探しはじめることが今日的課題であると考える。（平野正裕）